

卒業論文の要旨

論文題目	公害経験の継承に向けて取り組む公害資料館の役割と課題～環境教育との関係を中心に～
氏名	根津翔一
メジャー	環境学

(要旨)本論文では、「環境教育」と「博物館」の二つを主なテーマとし、中でも公害教育と公害資料館に焦点を当て、その役割と課題、今後の展望を考えた。公害資料館での公害教育がもつ役割と課題を明らかにするため、環境教育から公害教育へ、博物館から公害資料館へ焦点を絞り込んで調査していった。

はじめに、三年次の専攻演習(ゼミ)における研究を再検討し、博物館で行われる環境教育について調査を行った。博物館では、学校教育よりも多種多様な学習が可能である。市民参加型の調査や専門講座の開催、学校との連携授業など、実体験をともなった主体的な学びは、環境教育を含めたすべての学習に効果的である。一方で、博物館での教育の課題を主張する声も多いことが明らかとなった。博物館の展示は恣意的なものであり、それを紛れもなく「正しい」と受け止めることは非常に危険なためである。

次に、環境教育の中でも特に公害教育について先行研究を調査した。公害教育とは、自然保護教育と並び現在の環境教育の源流となった教育活動である。しかし、環境教育の前身的教育活動であると同時に、人権擁護の姿勢や市民教育、地域社会とのつながりを重視する点で、現在の環境教育を構成する重要な一角でもあることがわかった。

続いて、公害資料館で行われる公害教育と公害経験の継承について、事例研究とフィールドワークの結果をもとに検討し、その役割や課題を考えた。公害問題の歴史に関わる実物資料は少なく、多くの資料館の展示はパネルや映像に頼ることになる。調査してみると展示の内容について、「公害は終わり、環境が改善された」というメッセージを発信しているのではと指摘する声は多い。四日市公害と環境未来館では、環境改善の取り組みや現在の四日市市の自然環境を伝える展示は明るい雰囲気、それまでの公害の被害の暗さとは正反対の印象を受けた。加えて、喘息患者の受けた差別の問題への言及も展示にはほとんどされていなかった。現在も公害病で苦しんでいる人々の存在を軽視して、「公害は終わった」という印象を与えてはいけないと考えられる。

今回の調査の結果、公害資料館にて公害経験を学ぶ・継承する際に重要な点は、展示を主体的に読み解き公害と向き合う姿勢であることが判明した。公害資料館の展示や資料、館職員の人との会話などを通し、自分の中に「公害」を位置づけることが公害経験の継承において非常に重要であり、学習者と資料館が互いに課題を自覚しともに公害を考えることが、より意義のある公害教育へ繋がる方法である。現在も課題は多いものの、公害教育を行う場として公害資料館の必要性は高いことが本論文から明らかとなった。

(指導教員の推薦のコメント)

「公害」という負の記憶を継承し、表象していく場として「公害資料館」という存在に焦点を当て、環境教育の文脈からその現状と課題を多面的に描き出そうとした労作である。また、実際に「四日市公害と環境未来館」のフィールドワークを実施し、現地調査から得られた知見と、そこから導き出された「公害展示」への評価が反映されているという点で、オリジナリティも高い。よって、優秀卒論に推薦するものである。